委託事業実施内容報告書
平成２３年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業
【日本語教室の設置運営】

受託団体名：ＮＰＯ法人　プロジェクトまえばし

１．事業の趣旨・目的

（１）事業の目的

地域の外国人住民が、母語話者による補助も受けながら日本語を学ぶことで言葉の壁による生活上の不安を解消し、「はればれ」とした心で、自尊心を持って、快適で自立した生活が出来るように学習支援を行う。さらに、そうした生活を基盤に学習者が自主的・自発的に地域の活動に参加することへの支援も行う。

（２）経緯・沿革

・地域の状況

前橋市総社町およびその周辺地域に立地する多くの企業でブラジル人を中心とした外国人の雇用が進み、地域にブラジル人学校・保育所、ブラジル人教会、ブラジル食品店などができるまでにその数が増加している。近年のいわゆる経済危機や昨年の震災により多くの外国人が帰国したとはいえ、両親の母語を維持していない学齢期の子どもがいる。既に生活の基盤を日本に築いている等の理由から当地にとどまる者も多く、集住地区とよびうるか否かはともかく、依然として多くの外国人がここに居住している。震災後に来日した者も少なくない。公立の小中学校、保育園に通う外国人児童も多い。最近では、中国人、インドネシア人を中心としたアジア地域からの技能実習生、留学生も増加している。

これに伴って、地域の日本人住民と外国人との間で、主として言葉の障壁による様々な生活上の軋轢が生じている。

このような状況の中、ＮＰＯ法人プロジェクトまえばしは、平成１９年度に群馬県と協働で「多文化共生の地域づくりの調査事業」を実施するなど、日本語教室の開設以前から地域の外国人の抱える問題、要望の聞き取りをおこなってきた。そこに寄せられた内容は、「役所や公共機関等で、書式の読み方･書き方が分からなくて困った」、「緊急のときに、医療機関の利用法が分からなかった」、「母語よりも日本語のほうが流暢になってしまった自分の子どもとの会話に困難を感じることがある」、「役所での手続きなどに、自分より日本語のできる学齢期の子どもを通訳として同伴せざるを得ないことがある。その際は、子どもには学校を欠席させることになり、学業に支障がでる」、「職場でも意思の疎通が自由に図れないため、自分に非のないことでも非難され、それについて釈明も反論もできない」といったものである。つまり、日本語能力が十分でないために、生活上のごく些細なこと一つ一つに不便をおぼえ、さらに自分に対する誇りや自信も失いかねないという状況がうかがわれる。そして、こうした外国人住民の何よりの要望は、「日本語を習得することで、周囲の日本人との関係をよりよいものにしたい」ということであった。

しかし長年にわたって集住地区として存続してきた地域とは異なり、この地域では外国人住民のための日本語学習支援の態勢が十分に確立しているとはいいがたい。日本語学校等もほとんどなく、生活者として学べる場は地域の国際交流協会の日本語教室等に限られてしまい、場所や時間・曜日等の制限のため、継続して学習することが困難である。

・平成２０年度以来の事業目的

上記の地域状況に鑑み、平成２０年度に日本語教室「はればれ」を開設し、今日まで運営を続けてきた。事業の一貫した目標は「外国人が、言葉の壁による生活上の不安を解消し、「はればれ」とした心で、自尊心を持って、快適で自立した生活が出

来るようになる」というものであり、日本語教室の名称「はればれ」にこめた願いでもある。
昨年度の事業ではこの目標をさらに発展させ、これまでどちらかといえば地域情報や支援の受け手と考えられがちであった外国人住民が情報を発信する側となり、その有する技能を活かして積極的・主体的に地域社会に参加して自己実現を図れるよう教室として支援し、それによって文化的により豊かな地域社会の形成にも貢献することを目指した。このことは、例年この地域の多くの学習グループ、文化団体が参加して開催される「総社地区文化祭」に教室として参加し、地域社会からも好評を受けるなど、一定の成果に結実した。しかし、こうした活動も振り返ってみると、外国人学習者よりはむしろ教室側の主導によるものであったことは否めない。また、その後の学習者からの聞き取りで分かったことは、地域参加・貢献以前の問題として、まず自らの生活の改善をさらに進めることが日本語学習の主たる目的であるということであった。
そうした反省をふまえ、今回は学習目標の主眼はあくまでも学習者の生活状況の改善という点におき、その延長として学習者が真に自発的に地域活動に参加することができるよう、側面から支援することを事業の目的とした。

（３）本事業の特質

上記の目的実現のため、当日本語教室では、以下の点を特に考慮した。

・**授業時間**：
学習の動機付けおよび学習事項の演習の時間を確保し、かつ学習者が無理なく継続できるよう、一回の授業時間を原則２時間とした。
近隣地域からの参加者の便宜のため、午前の授業開始時間を１０時とした。

・**授業日**：
平日は働いている学習者の事情を考慮し、まとまった時間が取れる日曜日を授業日とした。ただし、日曜日は学習者が家族と過ごすための貴重な時間である事も考慮し、午前中で終了するよう設定した。
また、日曜日の午前の授業に毎回参加することが困難な学習者、週１回のグループ授業では十分な学習効果がえられない学習者の事情を考慮し、日曜午後、平日夜間にも授業をおこなった。

・**教室開設場所**：
昨年度に続き、総社公民館で教室を開設した。
公民館は、地域の様々な文化・教育関係の団体が活動に利用している場であり、したがって、ここで教室を開くことで、これらの団体の関係者に教室について知ってもらうことができ、交流する機会も生まれやすくなる。

・**教室スタッフ**：
資格・経験のある日本語教師、学習者の母語に通じ、外国と日本の言語や文化の違いを熟知している日系人通訳、学習者の母語を学んだ経験のある補助員の連携で、日本人スタッフと学習者の意志の疎通を容易にし、きめ細かい指導ができるよう図った。

・**運営委員会**：
地域の人的な結びつきを生かし、学識経験者、地元自治会関係者、ＮＰＯ法人関係者等により構成される運営委員会を設立し、効果的・効率的な教室運営を行うことを図った。

・**クラス分け**：
入門、初級、中上級の会話クラス、および漢字クラスという４クラスを基本とし、原則として各クラス一人の担当講師のもとで、継続一貫した系統的な学習ができる態勢をとったが、学習者の日本語力・要望その他の事情に応じて柔軟に対応した。

・**教材**：
基本的に市販の教材を利用した。
文法、かな・漢字学習、能力試験対策など、目的別に代表的な教材をそろえ、受

講者が自分に合ったものを選べるようにした。同じ教材を継続して使用することで、受講者にとっては自己の学習の進捗状況がよく分かり、またそれを学習し終えたときには大きな達成感がえられるという効果もある。

・日本語指導および授業内容：

各受講者に個人記録カードを用意して、最初の授業の際に自身の日本語力の現状と目標を書いてもらい、受講者の要望を的確に把握できるように努めた。

毎回の授業内容・教材は、原則として受講者の要望を聞いて決めていった。

各回実際の生活に関わりのあるテーマを決め、一回完結型でありながら、文法項目も学べるよう授業を組み立てた。

毎回、受講者自身にその日の学習記録を書いてもらった。学習テーマだけでなく、覚えた言葉や表現、簡単な日記まで書いてもらい、受講者の学習の振り返り、スタッフ間の授業の引継ぎに資するものとした。

「漢字文化圏の出身で、読み書きはできるが、聞き取りが難しい」、「在住期間が長く、会話はできるが、読み書きは平仮名･カタカナでも大変」、「日本語能力試験を受けたい」と、日本語学習について多様な事情を抱える学習者の個別的な要望に応えられるよう、必要に応じて個人指導もおこなった。

他の日本語教室関係者の見学を積極的に受け入れ、日本語指導に関する知識・情報の共有、蓄積を図った。これにより地域全体の日本語指導の質の向上も期待できる。

・イベントの開催：

学んだ日本語を実際に使用してその運用能力の向上を図り、また地域社会とのつながりを築くため、授業の一環として、地域の団体と協力しあるいは一般の日本人を招いてイベントを開催した。

・広報活動：

地域の多くの在住外国人が足を運ぶ輸入食材店や教会、外国人学校・保育所、外国人を多く雇用している地元企業および人材派遣会社、地域の国際交流協会、地域の日本語学校などを中心にチラシを配布した。同時に地域の人的なつながりを生かして紹介活動を行った。

・託児所の設置、送迎の提供、生活相談：

子供のいる学習者・スタッフが安心して参加できるよう、資格のある保育士のいる託児所を日曜午前の授業には毎回設置した。託児所では文字や数字を使った遊びを取り入れ、外国人児童の日本語学習にも資するものとした。

容易に利用できる交通手段がない学習者には、可能な限り送迎をおこなうように努めた。

地域の生活者でもある受講者の簡単な生活相談には常に応じられる態勢をとった。

２　運営委員会の開催について

（１）概要

本事業の目的実現のため、日本語教室運営に関する協議と検討を行う。

（２）各会議の概要

・第一回

①日　時：２０１１年５月８日（日）１０時～
②場　所：総社公民館
③出席者：増木里美、岩井愛、森田恵、瀧澤清美、佐藤宏、小林肇
④議　題：
〔１〕２３年度文化庁委託事業について
〔２〕日本語教室の授業計画
〔３〕今後の日程

⑤概　要：
今年度事業の目標、計画、日程等について確認し、各クラスの担当講師を決定、使用教材を検討し、授業日の一日の流れについても確認した。また、第一回授業として行うイベントの内容について検討した。

・第二回
①日　時：２０１１年８月２８日（日）１３時～
②場　所：総社公民館
③出席者：増木里美、岩井愛、森田恵、瀧澤清美、佐藤宏、小林肇
④議　題：
〔１〕前半（６月～８月）の活動の振り返りと教室の現況
〔２〕後半（１０月～）の活動、授業計画
〔３〕イベントについて
⑤概　要：
これまでの活動および教室の状況について報告と検討がなされた。特に震災後の電力事情への対応として自動車業界を中心に日曜操業が実施され、当教室でも多くの学習者が日曜日の授業に参加できなくなるという事態が生じたのであるが、それに対して講じた対策（平日授業の開催など）の是非が検討された。
このような現状、および産業界の日曜操業態勢が継続した場合を考慮して、後半の活動、授業計画に再検討を加えた。また、１０月のイベントについて、準備、役割分担、当日の日程など検討・確認した。

・第三回
①日　時：２０１２年２月１２日（日）１３時～
②場　所：総社公民館
③出席者：増木里美、岩井愛、森田恵、瀧澤清美、小林肇
④議　題：
〔１〕２３年度事業の反省
〔２〕事業終了後の日本語教室について
⑤概　要：
事業の終了を受けて、教室運営、授業（イベント）等の全体にわたって振りかえり、検討した。特に震災後の諸事情の影響に対する対処が適切であったかが検討された。
また、事業終了後、どのような形で教室を継続していくかについて検討した。

３　日本語教室の開催について

（１）講座名：学習者の母語話者と日本語教師による日本語教室
（日本語教室の名称：日本語教室　はればれ）

（２）開催場所：
・総社公民館

（所在地：群馬県前橋市総社町総社１５９６－１（２３年８月まで）、群馬県前橋市総社町総社１５８３－２（２３年１０月以降））

（３）学習目標：
日本語を学ぶことで言葉の壁による生活上の不安を解消し、「はればれ」とした心で、自尊心を持って、快適で自立した生活が出来るようになる。さらに、そうした生活を基盤に、自ら積極的に地域の活動に参加できるようになる。
実践的な日本語を短期間で学ぶ

（４）使用した教材・リソース：
できる日本語、わたしのにほんご、会話の日本語、生きた素材で学ぶ中級から上級への日本語、にほんご宝船、日本語総まとめシリーズ N1～3、みんなで日本語 in 群馬、異文化ゲーム、生教材（広報など）

（５）受講者の募集方法：
- **方法**：チラシ配布、教室スタッフあるいは受講者による紹介
- **場所**：輸入食材店、教会、外国人学校・保育所、外国人を多く雇用している地元企業および人材派遣会社、地域の国際交流協会、地域の日本語学校、市の相談窓口
- **時期**：随時

（６）受講者の総数：５７名
（出身・国籍別内訳　アメリカ合衆国２名、イタリア１名、インドネシア１１名、中国２０名、ネパール１名、フィリピン２名、ブラジル１８名、ペルー２名）

（７）開催時間数（回数）：６０時間　（全２７回）

（８）日本語教室の具体的内容

回	開催日時	時間数	受講者数（託児数）	国籍・母語	教授者・補助者・保育者人数	内容
①	６月１９日 10:00-13:00	３時間	１８名 （２名）	ブラジル、ポルトガル語（４名） インドネシア、インドネシア語（６名） 中国、中国語（８名）	教授者５名 補助者２名 保育者１名	災害時に必要な日本語を学ぶ
②	６月２６日 10:00-12:00	２時間	５名 （２名）	ブラジル、ポルトガル語（１名） 中国、中国語（4名）	教授者４名 補助者２名 保育者１名	自己紹介、日常会話、類義語の区別
③	７月１０日 10:00-12:00	２時間	７名 （１名）	インドネシア、インドネシア語（５名） 中国、中国語（２名）	教授者３名 補助者２名 保育者１名	「買い物」の日本語、日本の文化を学ぶ（七夕）
④	７月１７日 10:00-12:00	２時間	５名 （１名）	インドネシア、インドネシア語（５名）	教授者３名 補助者１名 保育者１名	食べ物・好き嫌いの表現
⑤	７月２４日 10:00-12:00	２時間	３名 （２名）	ブラジル、ポルトガル語（３名）	教授者１名 補助者１名 保育者１名	挨拶の表現、自己紹介（国・職業）
⑥	７月３１日 10:00-12:00	２時間	３名 （３名）	中国、中国語（３名）	教授者４名 補助者２名 保育者１名	異文化ゲーム
⑦	８月４日 18:30-20:30	２時間	３名	ブラジル、ポルトガル語（３名）	教授者１名 補助者１名 保育者０名	依頼の表現、時間・日程の表現
⑧	８月１１日 18:30-20:30	２時間	２名	ブラジル、ポルトガル語（２名）	教授者　名 補助者　名	助詞と動詞の対応・用法

					保育者　名	
⑨	８月１８日 18:30-20:30	２時間	２名	ブラジル、ポルトガル語（２名）	教授者１名 補助者１名 保育者０名	動詞文（否定形、過去形）、形容詞、出身地について話す
⑩	８月２１日 10:00-12:00	２時間	０名 （１名）		教授者３名 補助者１名 保育者１名	
⑪	８月２８日 10:00-12:00	２時間	０名 （１名）		教授者２名 補助者２名 保育者１名	
⑫	１０月９日 10:00-13:00	３時間	２１名 （４名）	ブラジル、ポルトガル語（８名） 中国、中国語（７名） ペルー、スペイン語（２名） インドネシア、インドネシア語（１名） フィリピン、タガログ語（２名） 米国、英語（１名）	教授者６名 補助者２名 保育者１名	医療の語彙・病院での会話（症状の説明、医師への質問）、日本の食文化（そば打ち）を学ぶ
⑬	１０月１６日 10:00-12:00	２時間	１０名 （１名）	ブラジル、ポルトガル語（４名） 中国、中国語（１名） ペルー、スペイン語（２名） フィリピン、タガログ語（２名） インドネシア、インドネシア語（１名）	教授者３名 補助者２名 保育者１名	病気・病状の表現、能力試験対策、文字学習（ひらがな）、スピーチの日本語
⑭	１０月２３日 10:00-12:00	２時間	１５名 （２名）	ペルー、スペイン語（２名） フィリピン、タガログ語（２名） インドネシア、インドネシア語（８名） 中国、中国語（３名）	教授者３名 補助者２名 保育者１名	能力試験対策、会話（身近な出来事について話す）
⑮	１０月３０日 10:00-12:00	２時間	１１名 （２名）	ブラジル、ポルトガル語（２名） 中国、中国語（３名） インドネシア、インドネシア語（６名）	教授者３名 補助者２名 保育者１名	会話（趣味について話す）、能力試験対策
⑯	１１月１３日 10:00-12:00	２時間	５名 （１名）	中国、中国語（３名） インドネシア、インドネシア語（２名）	教授者３名 補助者２名 保育者１名	能力試験対策
⑰	１１月２７日 10:00-12:00	２時間	５名 （２名）	ブラジル、ポルトガル語（２名） 中国、中国語（１名） フィリピン、タガログ語（２名）	教授者２名 補助者２名 保育者１名	会話（仕事について話す）、能力試験対策
⑱	１２月１１日 10:00-12:00	２時間	１名 （０名）	中国、中国語（１名）	教授者１名 補助者２名 保育者１名	能力試験対策
⑲	１２月１８日 10:00-12:00	２時間	３名 （２名）	ブラジル、ポルトガル語（２名） 中国、中国語（１名）	教授者２名 補助者２名 保育者１名	会話（将来の計画について話す）
⑳	１２月１８日 13:00-15:00	２時間	０名		教授者２名 補助者１名 保育者０名	
㉑	１月８日 10:00-12:00	２時間	５名 （１名）	ブラジル、ポルトガル語（２名） 中国、中国語（２名） イタリア・イタリア語（１名）	教授者２名 補助者２名 保育者１名	日本語による発表（自国の食文化について）の準備学習（食生活・代表的な料理について話す）
㉒	１月８日 13:00-15:00	２時間	５名	ブラジル、ポルトガル語（３名） 中国、中国語（２名）	教授者１名 補助者１名 保育者０名	会話（年末年始の過ごし方について話す）、通信文（保育園からの連絡）を読む、書式（保育園の入園手続き書類）に記入する

㉓	１月１５日 10:00-12:00	２時間	８名 （１名）	ブラジル、ポルトガル語（３名） 中国、中国語（２名） イタリア・イタリア語（１名） インドネシア、インドネシア語（２名）	教授者３名 補助者２名 保育者１名	日本語による発表（自国の食文化について）の準備学習（ワーク・シートを利用して、代表的料理の紹介文・調理法を書く）
㉔	１月１５日 13:00-15:00	２時間	５名	ブラジル、ポルトガル語（２名） 中国、中国語（１名） インドネシア、インドネシア語（２名）	教授者１名 補助者１名 保育者　名	日本語による発表（自国の食文化について）の準備学習（インターネットを使って調べる）
㉕	１月２２日 10:00-12:00	２時間	３名 （２名）	フィリピン、タガログ語（２名） ブラジル、ポルトガル語（１名）	教授者２名 補助者２名 保育者１名	能力試験対策
㉖	１月２２日 13:00-15:00	２時間	１名	ブラジル、ポルトガル語（１名）	教授者１名 補助者１名 保育者０名	文字学習（ひらがな）
㉗	１月２９日 9:00-15:00	６時間	１６名 （０名）	中国、中国語（７名） ブラジル、ポルトガル語（３名） インドネシア、インドネシア語（３名） ネパール、ネパール語（１名） イタリア、イタリア語（１名） 米国、英語（１名）	教授者４名 補助者２名 保育者１名	日本語による発表（自国の食文化について）、一般参加者（日本人）を交えて各国料理で会食・交流

（９）特徴的な授業風景

◆第１回授業（防災講習）

〈１〉開催日：２０１１年６月１９日

〈２〉時間数：３時間

〈３〉開催場所：総社公民館

〈４〉受講者数：１８名

〈５〉内容：

・前橋市の危機管理室から講師を招き、防災について講習

・非常食（乾パン、インスタント五目御飯）の試食

〈６〉目的：

・災害への対処法、災害時に必要な日本語など、防災について学ぶ。

〈７〉当日の様子：

震災後、特に情報弱者となりやすい外国人の間では不安が広がっていた。そこで、前橋市の危機管理室から講師を招き、防災についての講習を行った。「震度」や「マグニチュード」という用語の意義から、群馬県の災害の歴史、災害に備えての対策、災害時の行動など、防災全般について学んだ。パワーポイントを使って断層の地図や被災地の写真等を映しながらの、視覚にも訴える内容で、受講者は真剣に聞いていた。内容が内容だけに使われる日本語も難しいものであったが、教室スタッフおよびこの日協力を仰いだ群馬県観光国際協会の関係者が、受講者の母語または簡単な日本語で補助をおこなった。

質疑応答でも、「液状化」などの難しい用語や建造物の安全基準等について、受講者は積極的に質問していた。質問の内容も具体的で、自分の住居の現状など、日本語でよく説明していた。

最後に、非常食の乾パンとインスタント五目御飯の試食をした。日本では非常食として一般的な乾パンも外国人にはほとんど知られておらず、この日初

めて食べたという参加者が多かった。

◆第１２回授業（健康・医療についての講習、そば打ち）
〈１〉開催日：１０月９日
〈２〉時間数：３時間
〈３〉開催場所：総社公民館
〈４〉参加者数：２１名
〈５〉内容：
・地域の開業医を招いて、健康・医療について講習
・受講者が患者役になって、講師の医師とのロール・プレイで診察時の会話を学ぶ
・そば打ち体験・試食
〈６〉目的：
・健康・医療に関する言葉、診察時に必要な表現を学ぶ
・日本の伝統文化、そば打ちを体験する
〈７〉当日の様子：
外国人住民が普段の生活で特に困難、不便を感じていることの一つが、医療や疾病についての言葉、病院での会話である。そこで、前橋市で開業している医師を招いて、健康・医療についての講習をおこなった。
まず受講者を５～６人のグループに分け、各グループに一人ずつ教室のスタッフがついて事前学習をおこなった。ここでは、風邪、高血圧などの典型的な病気について、症状をどう説明するか、医師の説明をいかに理解するかを学んだ。またこのときに、今後の日本語学習全般について、各受講者の相談に応じた。
その後、各グループから一人ずつの受講者が患者役となって、講師の医師とロール・プレイ形式で診察室での会話を実演した。受講者には多少の緊張もあったようだが、症状の説明も医師との応対もしっかりしたものであった。重要な用語（病名、診療科名、症状を伝える表現、薬の名称など）は講師が適宜ホワイト・ボードに書きだして説明し、語彙学習としても有益だった。質疑応答では、持病のことから原発事故による放射能が引き起こす健康被害のことまで、幅広い内容の質問が出されたが、講師の医師は丁寧に根拠を示して答え、受講者からは、「とても役に立った」という感想が寄せられた。
この日の授業の後半は日本文化体験として、健康を考えた料理を学ぶ地域の学習グループの協力を得て、地域の様々なイベントでそば打ちの実演・講習をしている講師を招き、そば打ち体験とそばの試食をおこなった。
講師が、材料やそば打ちのこつについて説明しながら、慣れた手つきで粉をこね、麺棒で延ばしていく様子に、受講者は写真や動画撮影をしながら見入っていた。そばを切るところでは、講師が切り方や注意点を説明して実演したあとで、受講者の中の希望者が、講師の指導のもと、実際にそば切りを体験した。ゆで時間が均一になるように、太さを揃えて切らなければならず、これが難しそうだったが、皆楽しんでやっていた。
最後は、講師手製のそばつゆで、出来上がったそばを食べながらの歓談となった。中国人の受講者は、「中国の麺は引っ張ったり振り回したりして延ばしていくが、そばは棒で延ばして切るという、作り方の違いに興味をひかれた」と語っていた。
この日の様子は地元の地方新聞でも紹介された。

◆第２７回授業（各国料理調理実演と日本語発表会）
〈１〉開催日：１月２９日
〈２〉時間数：６時間
〈３〉開催場所：総社公民館

〈４〉受講者数：１６名
〈５〉内容：
・地域の一般の日本人を招き、受講者が出身国の代表的料理を、調理実演と日本語でのスピーチで紹介
〈６〉目的：
・教室で学んだことを実践する。
・受講者と地域の一般の日本人との交流を図る。
〈７〉当日の様子：
今回の委託事業最後の授業は、受講者がこれまでに教室で学んできたことを総合的に実践し、さらに地域社会との交流を深めるため、地域の一般の日本人を招いて、受講者による自国料理の調理実演と、料理・食文化についての日本語での発表をおこなった
イタリア、インドネシア、中国、ブラジル出身の受講者が、それぞれの国の代表的料理である、りんごのリゾット、サテ・アヤム（インドネシア風焼き鳥）とサンバル（辛味のソース）、糖醋排骨（中国風スペアリブ）、パステウ（ブラジル風春巻き）を調理して、料理の作り方、自国の食文化について日本語で発表した。
調理に際しては、教室スタッフ、日本人参加者も各調理台にわかれて、受講者の説明を聞きながら手伝いをした。グリルの火力調節がうまくいかないといった事態にも、受講生、日本人参加者が考えを出し合いながら対処した。こうしたやり取りもまた、実際の場で日本語を使うよい練習になっていた。
出来上がった料理はどれも日本人参加者に好評で、食事をしながら受講者と日本人参加者との間で会話が弾んでいた。
受講者による発表は、ホワイト・ボードに調理法などを書きだしながらの、堂々としたものであった。質疑応答でも、「国の中のどの地域の料理なのか」、「主としてどんな機会に食べられているのか」といった質問に、しっかりと答えられていた。
事前に数回の授業をつかって、各国の食文化について話し合ったり、ワーク・シートに発表内容をまとめていったりといった準備学習をして臨んだこの日の発表会であったが、学習成果を十分に発揮できていた。

４　事業に対する評価について

（１）当初の学習目標の達成状況
・日本語能力試験Ｎ１合格者２名
・日本語能力試験Ｎ２合格者４名
・日本語能力試験Ｎ３合格者１名

・前橋市国際交流協会主催の日本語発表会でＭＩＡ賞（国際交流の観点から優れている発表におくられる）受賞
・伊勢崎国際交流協会主催のスピーチコンテストで最優秀賞受賞
・永住権取得（自作作文提出）１名
・「当初は会話だけできればよいと思っていたが、教室に通ううちに読み書きも真剣に学ぼうという気持ちになり、今では日本語の書物を辞書を引きながら読んでいる」（ブラジル人受講生より聞き取り）

（２）学習者の習得状況

１．学習者のレベル
教室全体でのレベルは幅広く、初級から上級者まで、能力試験についていえばＮ１からＮ３までの受験者が参加した。ただ全くの入門初学者は少なく、初級者もある程度、文法や表現の知識はあり、それを使ってどう会話していくか、また、簡単な日常会話はできるが学習によって正確さ・適切さを身につけたいという段階の学習者が多かった。

２．学習者のニーズ
ニーズとしては、会話力の向上、文法知識を確実なものにする、能力試験合格、表記学習などがあり、特に能力試験対策への要望が高かった。

３．指導内容
会話については、とにかく受講者に多くの発話の機会をつくるようにした。会話練習では様々な実際の場面を想定して行い、受講者が楽しみながら実用的な会話力を身に付けられるように努めた。
上級者のための会話指導では、より自然な表現で話すこと、さらに会話の内容にも踏み込んで、相手の興味を引くように話すことを目指した。

文法学習、能力試験対策では、テキスト・問題集を用いて、文法解説、語彙説明、例文提示という形で進めた。その際、既習の文法・語彙などで忘れていたものがあればその場で確認し、知識を確実なものにするよう努めた。
文法学習・能力試験特有のなじみにくい、硬い表現を学ぶ際には、対応する普通の表現を確認し、理解の助けとした。また、そうした硬い表現も、新聞・ニュース・掲示板等、普段の生活の中で確認して暗記していくように勧めた。
文法学習・試験対策はどうしても単調になりがちであるが、テキストの例文や問題文を講師が音読してきかせ、文章に親しみが持てるようにこころがけた。音読はまた、聴覚的な理解の助けにもなった。

表記学習は会話練習と組み合わせた。会話の中で出てきた言葉で、受講者のニーズに照らして、読め、あるいは書けた方がよいと思われるものを書きだして学んでいった。書く練習では、特に漢字はバランスが難しいので、まず講師が全体を書いて示し、後に一画ずつ一緒に書いていった。

４．結果
上記（１）当初の学習目標の達成状況の項参照

（３）日本語教室設置運営の効果、成果

１．学習者

地域には、独学独習で日本語を学ぶ外国人も多い。都合のよい時間帯に開設している教室がないなど、やむをえない事情による場合もある。しかし大抵の学習者にとっては、教室に通うことでより能率的に日本語を習得できるといえよう。これは、

会話能力の習得においては明白であるが、その他の点でも同様である。教室では、疑問点は直接講師にたずねることができるうえ、毎週授業があるということが、学習の動機付けになる。継続して受講することが難しい学習者に対しても、わずかの回数でも教室に来ることができれば、その際に、自分で勉強を進め、目標を達成していくための方法をアドバイスすることができる。
教室では、文法学習、日本語能力試験対策にも重きをおいた。能力試験は、生活のための日本語と直接には結びつかないように思われるかもしれないが、分かりやすい到達度の目安、具体的な学習の目標にはなりうる。その意味では、試験合格を目的とした学習も、生活のための日本語の習得にとって有効と考えられる。また職場でアピールしやすい資格でもあり、受験志望の学習者は多い。しかし特に中級以上は独学が難しく、そして、それにもかかわらず、能力試験対策指導をしている教室は多いとは言えないのが実情である。このような状況を考えると、当教室が能力試験対策に力を入れていることの意義は大きい。受講者の中には、居住地の近くに能力試験のための勉強ができる場がないと言って、片道１時間近くをかけて、当教室に通う者もいた。また同じく試験合格を目指す受講者が共に学ぶことは、お互いによい意味で刺激になっていた。結果として教室から２名の能力試験Ｎ１合格者、４名のＮ２合格者、１名のＮ３合格者が出た。
学習者同士で教えあうことも有効である。この教室でも、早い時期から参加し始めた学習者が、新規の受講者に、自分の経験を踏まえた助言をしていた。

同時に日本語教室は、ともすれば社会の中で孤立してしまいかねない外国人が、他の人々との接触を保てる場である。国籍や母語を同じくする、あるいは異にする他の学習者と交流し、生活上、日本語学習上の情報交換もできる。実際、母語も国籍も異なる受講者同士が、この教室で出会ったことをきっかけに、友人として親交を結ぶようになったり、お互いの母語を教え合うようになったりしていった。
また教室スタッフは受講者に積極的に言葉をかけ、誠意を持って話を聞くように努めた。受講者にとっては、たとえ十分に流暢でなくとも「自分の日本語が聞いてもらえる場」となっていた。さらに、授業後に連れ立って行楽に出かけたり、お互いの自宅に招きあったりと、教室スタッフと受講者という関係を越えて、親交を結ぶこともできた。
さらにイベントでは、受講者は、様々な日本人と実際に日本語を使いながら交流することができた。普段、ややもすると職場の同僚や同じ国の出身者といった限られた人間関係の中で生活を送りがちな外国人にとって、貴重な機会と言える。同時にイベントは、その準備や後片付けも含めて、受講者、スタッフがともに協力し合い、楽しみながら仲間意識をはぐくむ場としても効果的であった。

教室では、必要があれば通訳者の協力も得て、学習者の生活相談にも応じた。銀行のＡＴＭでの送金の仕方、子どもの学校に提出する書類の作成、アパート探し、保育園の入園手続きなど、個別に対応した。普段通っている教室、顔なじみのスタッフということで、学習者にとっては生活上の様々な問題について気軽に相談し不安を解消できる場となっていたと思える。これは、外国人がより快適な生活を送れるように支援するという当教室の目的の実現にも資するものであった。

日本語を効果的に学ぶというだけでなく、こうした交流、情報交換、相談の場としての教室が地域に存続することは、在住外国人にとって重要であろう。

２．スタッフ

教室は、日本語指導者の育成という機能も果たしている。
当教室のスタッフの中心は資格・経験を有する日本語教師であり、日本語教師養成講座の講師経験者もいる。補助スタッフはこのような資格･経験のある講師の授業に参加

することで、実地に日本語指導を学ぶことがでた。
さらに日本語指導に関心のある見学者を積極的に受け入れ、授業にも参加してもらった。

教室はまた、スタッフにとっても拠りどころとよべる場になっていた。日本語指導や語学の技能、ボランティア活動や海外生活などの経験を活用しながら、地域に貢献できることの意義は大きい。
もちろん教室は、第一には、日本語を学んで生活を改善したい学習者のためのものであるが、そうした目的を効果的に実現するには、教室の活動がスタッフにとってもやりがいのあるものでなければならない。
当教室では、子どものいるスタッフでも参加しやすいよう託児を設け、また震災後の様々な事情により、日程やシフトの変更が必要になった際も、スタッフに無理な負担がかからないように考慮した。

３．通訳

ある程度の日本語能力を有する学習者については、日本語のみによる授業も効果的であろう。しかし、全くの入門者の場合、日本語のみによる授業ではほとんど理解できず、教師との意思の疎通も図れないため、学習を継続することが苦痛になりかねない。初級段階でも、よほど細かいクラス分けをしないかぎり、到達度に開きのある学習者が同じクラスでともに授業を受けることになり、どの学習者を基準に授業を組み立てるか、困難な判断を迫られることになる。そして、どのように授業を進めても、一部の学習者には「内容が簡単すぎる」「難しくてついていけない」という不満が残ってしまう。
このような問題を解消するため、当教室の授業には通訳者が参加した。これにより、入門者は授業にストレスを感じることなく、能率的に理解しながら学習を続けることができ、初級レベルの受講者の到達度の格差も補いながら授業をおこなうことができた。

また、受講者から様々な生活上の相談を受けたときにも、通訳者の協力で適切に対応することができた。

４．指導法

ＮＰＯプロジェクトまえばしでは、平成２０年度以来の日本語教室の運営、およびそれ以前から続けている交流イベントなど様々な活動を通じて、地域の在住外国人の問題に取り組んできた。また教室では、受講生が生活の中で実際に経験した問題を授業で取り上げることも多かった。このようにして、地域の学習者の要望、実情を反映した授業内容が形成されてきた。これは、今後この地域で日本語指導を行う上で、有益な資産となりうる。

（４）地域の関係者との連携による効果、成果　等

１．イベント

当教室では、受講者が教室で学んだ日本語を実際の場で運用する力をつけられるよう、授業の一環として計３回のイベントを開催した。テーマとして取り上げたのは、防災、医療・健康、食文化であった。
このうち、防災のイベントでは前橋市の危機管理室や群馬県観光国際協会と、医療・健康イベントでは前橋市医師会や健康を考えた料理を学ぶ地域の学習グループと協力関係を築くことができ、食文化のイベントでは、地域の一般の日本人住民とつながりを持つことができた。医療・健康のイベントは地元の地方紙でもとりあげられた。

こうしたイベントが、受講者にとって、学んだ日本語を実際に使用しながら様々な日本人と交流できる場として、また日本の文化、社会生活事情を関係者あるいは専門家から直接学べる場として、さらに自分の背景となっている文化を日本人に自ら紹介できる場として、有益であることは言うまでもない。
しかし、同時に参加・協力した日本人にとっても、地域の外国人の存在に気付き、外国人との接し方や、その文化について学ぶよい機会であったと考えられる。

２．他の日本語教室との連携

当教室の講師の中には、地域の他の日本語教室でも指導をしているものもいる。また、他の教室の日本語教師の見学を積極的に受け入れ、授業やその後のスタッフ会議にも参加してもらった。こうした交流を通じて、意見･情報の交換、相互の授業の検討をおこなった。これは地域全体の日本語指導の質を高めることにつながるものである。
さらに、多くの技能実習生が、他の日本語学校からの紹介で当教室に参加するようになった。従来の広報活動がある程度限界に来ており、学習希望者に教室の存在・活動が十分に伝わらないという状況があったので、このような協力関係は貴重である。

（５）改善点、今後の課題について

ａ．現状

平成２０年度以来教室運営を続けてきて、当教室は、地域の在住外国人の間に「いつもやっている教室」として定着しつつある。受講者の中には、夜勤明けにもかかわらずそのまま教室に駆けつけてくるもの、他の日本語教室と掛け持ちで参加しているもの、片道１時間近くをかけて通ってくるものもいて、学習者の学びたいという意識は非常に高い。
それに応えるため、当教室の講師は常に学習者のレベル、ニーズを把握し、それに沿って授業内容、教材の利用法を検討し、より効果的な授業をすることに努めている。
結果としては、２名の日本語能力試験Ｎ１合格者、４名のＮ２合格者、１名のＮ３合格者を出したほか、２名の受講者が地域の国際交流協会が主催する日本語スピーチ・コンテスト、発表会で入賞し、１名が自作の作文を提出して永住ビザを取得した。

スタッフにとっても､教室は心のよりどころとなっている｡日本語指導の資格や能力、語学力、ボランティア活動や海外在住の経験を活かせる場であると同時に、文化の多様性が尊重され､日本人･外国人の区別なく皆が自尊心を持って快適に暮らせる地域社会を作るという理想を共有できる場でもある。見学者の中にも、何らかの形で教室に参加したいという声が多い。

教室の目的は、第一には外国人が言葉の不安を解消してより快適な生活を送れるように支援することであるが、地域の様々な活動にも参加している。これまで地域の文化祭や、児童のためのイベントに参加して好評を得た。
公民館を活動の拠点とする学習グループの一つとしても認められている
また主としてイベントを通じて、地域の様々な団体、個人と協力関係を築き上げてきた。
このように地域との結びつきを大切にしながら活動している。

当教室の特質である、託児所の完備、通訳の補助、生活相談、各種手続の支援も、受講者の間で好評である。子育て中の学習者でも、全くの入門者でも安心して参加できる教室の存在意義は決して小さくはないであろう。

ただ、今年度は、当教室においても震災による影響が甚大であった。昨年度皆勤又はそれに近い出席率で参加していた学習者が、震災後帰国してしまったり、勤務先が日

曜操業となったために参加できなくなってしまったりした。特にこの自動車業界を中心とした日曜操業態勢の影響は、同業界関連の企業に勤務する受講者の多い当教室にとっては極めて深刻で、受講者数が０人ということも数回あった。また、震災後は、直後の一時期を除き、以前より職場での仕事が増え、多忙になったという受講者が多かった。震災の被害の大きかった地域の工場の生産量を埋め合わせるためのものか、復興需要のようなものか、事情は明らかではないが、週に６日、場合によっては７日連続で勤務しなければならないことがあったというものもいる。このような状況では、休日には家事をしたり休息をとったりすることが最優先となり、教室に通う余裕がないと、多くの受講者が語っていた。
こうした事態に対して、教室としては、当初から予定していた日曜の午前に加えて、平日夜間や日曜午後にも授業をおこなうなどして対処した。それでも、広報が十分にできなかったこともあって、多くの学習者の参加をみるまでには至らなかったが、この時間帯だからこそ参加できたという者もいた。
そして結果として、受講者総数は５７名を数えるまでなった。これは、個々の受講者の参加回数は多くはなかったかもしれないが、困難な状況の中、わずかな時間でも、可能な限り教室に来て学ぼうという意欲のある学習者がこの地域には多いということであろう。

ｂ．今後の課題

１．教室運営
安定して事業を継続してゆくには経済的基盤の確立が必要であるが、日本語教室の運営だけでは、それは容易ではない。スタッフや学習者の能力を活かしながら教室運営のための資金確保を図れる方法を第一に考えたいが、一方でイベント等で築いてきた地域の様々な個人、団体との協力関係をさらに発展させ、日本語教育活動の重要性に対する理解をえて、広く寄付を募ることも検討している。

２．事業の目的
前年度は事業の目的として、外国人が自ら情報を発信する側となり、その持てる技能を活用し、より積極的・主体的に地域社会の活動に参加できるよう日本語学習を通じて支援することを掲げ、地域文化祭に参加して好評を得るなど、一定の成果をあげた。
しかし、振り返ってみると、どちらかといえば受講者よりも教室主導での地域参加になってしまい、まずは日本語を学ぶことで自らの生活状況のさらなる改善を図りたいという学習者の意向とは離れてしまった。
そこで、今年度は基本に立ち返って、外国人が言葉の不自由さを解消し、より快適な生活を送れるように支援することを活動の主たる目的とした。しかし、地域の一員として生活する以上、真に快適な社会生活を送るには地域社会とのつながりが重要であることに変わりはない。
基本的な生活状況の改善を図りながら、少しずつでも、学習者自らが自分の意思で地域の活動に関わっていけるような、日本語学習支援のあり方を考えていきたい。

３．授業日、時間帯
授業をおこなう曜日、時間帯については、様々な事情を考慮し、できるだけ多くの学習者が無理なく継続して参加できるようにと考え、当初の計画では日曜日の午前１０時から１２時までとした。
しかし、家族のいる学習者にとって日曜日はそろって行楽等に出かける機会でもあり、学齢期の子どものいる学習者の場合、学校の行事と重なることもある。外国人労働者の中には、日本人の同僚が休みを取る土曜･日曜に勤務するものも多い。地域の教会に通う外国人たちは、この時間帯では礼拝と重なってしまうために参加できない、と言っている。
これに加え、今年度は震災後の社会経済事情による問題もあった。当教室の多くの受講者は自動車関連の企業に勤務しており、同業界を中心とした夏期の日曜操業態勢により、授業に参加できなくなってしまった。

あらゆる点を考慮して、やはり、日曜の午前が授業時間として最適であることは否定できない。地域には、他に日曜日に授業をしている教室がないことからも、当教室が日曜日に授業をする意義は大きい。
では、その時間に参加できない学習者にいかに対応していくか。できる範囲で、教室スタッフが受講者の都合のよい時間に、受講者の自宅におもむくなどして補習を行うという試みも始めていて、好評を得ている。さらに震災後の事態への対応として、日曜の午前に加えて、平日夜間、日曜午後にも授業をおこなった。スタッフの確保が難しく、広報も十分にできなかったが、自動車業界の関係者以外にも、これらの時間帯の方が参加しやすいという学習者がいることも分かった。
このように日曜の午前の授業を原則としながら、出張授業や他の時間帯の授業も継続できるか、その場合、スタッフの確保などの問題をいかに解決するか、考えていきたい。

４．授業形態

昨年度は、授業を受講者の要望に直結したものとし、受講者自身が目的意識をもって参加することを期するため、固定したクラス分けはせず、各授業日に参加した受講者の要望を聞き、それぞれの日本語能力を考慮したうえで、その場でクラスを作って授業を行った。受講者の継続した参加が難しく、各回で受講者の顔ぶれがことなる、ということも、このような方式を採用した理由である。これによって、受講者はいつでも都合のよい時に参加して、希望する内容の授業を受けられることになり、一回一回の授業の満足度は高かったといえる。しかし、次第に各受講者の学習目的がしぼられてきて、事業の後半期では実質的には「基本文法・会話」、「能力試験対策」、「表記・漢字学習」などほぼ固定したクラスで授業を行うことになった。また、特に入門から初級段階の学習者の場合、継続性・一貫性のある授業を通じて学習を積み上げてゆくことの必要性も高い。クラス分けが一定しないことで、長期的な観点からの学習者の到達状況の把握とそれに対する適切な対処が難しいという問題もある。
昨年度のこうした状況をふまえ、今年度の授業形態は、入門、初級、中上級の会話クラスと漢字クラスという４つのクラスを基本のクラスとして設け、原則として各クラス一人の担当講師が一貫して指導する、要望に応じて能力試験対策のクラスや児童を対象としたクラスを設置して、きめ細かい指導をおこなう、という計画であった。
しかし、実際には、主として震災後の社会経済事情により、受講者にとっては昨年以上に継続参加が困難な事態となってしまった。それに応じてスタッフのシフトも変更せざるを得なくなり、結局、昨年度事業前半期と同様、当日参加した受講者の要望に従ってクラスを編成し、授業をおこなうという形になった。
これは学習者のニーズに合わせた変更であり、適切だったと考えられる。また、結果としては、事業の前期は基本的な文法と会話練習中心、中期は能力試験対策、後期は日本語発表イベントに向けての準備学習という良い流れができた。
このように結果としては良いものとなったが、授業当日にならないとクラス編成も授業内容も決められないということで、授業も教材も十分な準備ができないといった問題もあった。受講者の継続学習を支援する態勢を維持しながら、その時々の要望に柔軟に対応していくためには、どのような方策があるのか、難しい問題である。

イベント

地域の様々な日本人と交流しながら、教室で学んだ日本語を実際に使用し、その運用力をつけるため、授業の一環としてイベントを開催した。実際、イベントでは通常の授業よりも多くの受講者が参加し、交流という点でも、日本語の運用能力の面でも、十分な成果があった。また、イベントの開催を通じて、教室と地域の様々な団体との協力関係を築くこともできた。
このようにイベント自体は成功であったと言えるが、イベントのみ参加した受講者も多く、通常授業への参加、継続学習に結び付かなかった。今年度のイベントは授業の一部という位置づけで、交流よりも日本語運用力の伸長の方に重点を置き、内容も形態も通常授業に密着したものではあったが、さらに検討したい。

５．学齢期の外国人児童への対応
きわめて幼少の時期に来日した外国人児童の場合、母語よりも日本語のほうが流暢であることも稀ではなく、日本人と同様に小・中学校に通い、さらに高校にも問題なく進学できる。
一方で、ある程度高学年になってから来日したため、日本の学校の授業についてゆけるだけの日本語能力を身につけていない児童、あるいは、日本の学校になじめないといった理由で学校をやめてしまい、しかも経済的な事情などから外国人学校等にも通っていない、いわゆる不就学児童の場合は、深刻である。日本の学校に通い続けられれば、中学校までは卒業できるが、高校進学は難しい。全くの不就学の場合は、中学卒業の資格もなく、社会において行き場をなくしてしまいかねない。特に最近は、経済危機や震災の影響で多くの外国人学校が閉鎖に追い込まれ、状況はさらに難しくなっている。
こうした児童のために地域の日本語教室としてできることはないか。
教室では、託児担当のスタッフが学齢期前の児童の文字学習を支援するなどして、受講者からも好評をえているが、日本語と学校の課業の両方を指導できる態勢が必要ではないか、検討している。

６．広報活動
当地域には多くの外国人が居住し、日常生活の面でも、仕事上でも日本語の習得を必要としていると思われる。にもかかわらず、日本語教室の存在について、十分に知られているとはいいがたい。教室開設地の近くに長年居住し、日本語を学びたいという意志もありながら、本事業終了後になって初めて教室のことを知ったというものもいる。
参加した受講者も、ほとんどがスタッフや他の受講者の紹介によって、この教室を知ったとのことである。個人的な紹介があれば、安心して受講できるという利点はあるが、多くの学習者に周知するには限界がある。より効果的な広報手段を考えてゆきたい。

ｃ．今後の活動予定、展望

１．日本語指導･教室の継続
地域の実情を考えると、今後もこの地域で日本語指導を続ける必要性は高い。在住外国人が、日本語が十分にできないために、様々な生活上の不便に耐えざるを得ない、という状況はいまだにある。地域社会の様々な活動への参加ということについては、なおさら困難である。
もちろん、問題は外国人の側にばかりあるわけではない。多くの外国人が暮らす地区でありながら、まだ日本人住民の間には外国人一般、あるいは特定の国、民族に属する外国人に対する偏見が残っている。悲しむべきこと、恥ずべきことであるが、「近所で空き巣などの犯罪があると、まっ先に外国人を疑ってしまう」という声も聞く。しかし、このような偏見も、外国人と日本人の意思の疎通が十分に図られ、相互理解が進めば、徐々に改善してゆくと思われる。
そして、当教室の受講者についていえば、日本語を学ぶことでこうした状況を改善していきたいという気持ちは非常に強い。
スタッフの側も、学習者の熱意に応えるためにも、また自分自身の心のよりどころとしても、教室を存続させる意思は固い。
よって、いかなる形態によるものであれ、いずれにしてもこの地域で日本語指導を続けてゆきたいと考えている。

２．授業形態･内容

これまでの日本語教室の運営や交流行事の開催によって蓄積された、日本語指導技術・教材、外国人を取り巻く地域事情についての情報などを活用してゆくことは、言

うまでもない。
人的な面でも、現在参加しているスタッフのほとんどが継続して参加する意向である。さらに、授業見学やイベントに参加してこの日本語教室の活動に関心をもち、何らかの形で教室運営に参加、協力したいと希望しているものも少なくない。

授業のあり方については常に検討を重ねていく必要がある。
今年度は、主として震災の影響により、当初の計画の大幅な変更を迫られ、現場には混乱もあったが、結果としては、常に学習者の実情、要望に気を配り、柔軟に対応していくことの重要性、必要性を再確認できた。
震災後の事態に対する対応策として実施した平日夜間や日曜午後の授業にも、一定の成果があった。スタッフの確保などの問題もあるが継続する方向で考えている。

継続学習ということについていえば、言語の習得には継続学習が必要であることは論をまたないが、多くの学習者が家族や仕事を持っているという現実を考えると、継続学習の必要性を強調しすぎれば、かえって学習者を教室から遠ざけることになりかねない。継続して受講することが難しい学習者には、自分で学習を進めて目標を達成していく方法をアドバイスするなどして対応することもできる。当教室は、継続学習を促しつつも、学習者がいつでも気軽に参加できるような教室でありたい。

今年度は、イベントも授業の一環として行い、受講者の実際の場での日本語運用力向上に主眼をおく内容のものとした。
防災をテーマとしたイベントでは、前橋市の危機管理室の講師の話をきき、医療・健康のイベントでは、実際の医師とのロール・プレイで診察時の会話を練習し、また講師の指導のもと、そば打ちを体験できた。このように、様々な分野の専門家を相手に日本語学習の成果を実践できる場として、イベントを継続していきたい。
食文化をテーマとしたイベントでは、受講者が、一般の日本人も含めた聴衆に、自国の文化について発表した。こうした発表の場は、これからも設けていきたい。内容も出身国の文化紹介に限らず、外国人の視点での様々な提案（こんな情報がほしい、こんな店があったら…等）、災害時の地域での対応マニュアル作りなども検討している。

３．地域社会との連携

当教室は、主としてイベントにおいて、地域の様々な分野で活動する個人や団体の協力を得てきた。また、地域の日本人住民と交流も生まれた。このようにして、学習者が言葉だけでなく、地域のいろいろな社会文化事情を学び、地域社会に溶け込むことに、一定の成果をあげることができた。
このような形での地域との連携は、今後も続けていきたい。公民館を活動場所として利用することで、同じ公民館を利用する他の様々な団体と交流が生まれる可能性があり、また地域の活動に参加する機会も増えることが予想される。こうした結びつきは大切にしていきたい。
教室の第一の目的は、外国人が言葉の不自由さを解消し、より快適な生活を送れるようになることであるが、その延長上に、積極的に地域社会の活動に参加することで、より充実した自己実現を図れるようになるということも目指したい。それが地域全体の活性化、文化的に豊かな地域づくりにもつながる。そのためにも地域との結びつきをさらに強固なものにしたい。